



ジャズピアニスト

# 桑原あいさん

テレビ朝日の「サタデー・ステーション」、  
「サンデー・ステーション」のオープニングテーマの作  
曲者で、自ら演奏もしているジャズピアニスト  
の桑原あいさん。幼少期より輝かしい受賞歴を  
持ち、トップクラスの注目度を誇る若手ピアニ  
ストである彼女に、ピアノとの出会いやデビュー  
の経緯、それに法律との関わりや普段の生活に  
についてもお聞きしました。

聞き手・構成：雨宮 慶，西川 達也  
写真撮影：坂 仁根

— まず、ミュージシャンとしてのルーツをお聞かせください。

最初は音楽教室でエレクトーンという楽器をやっ  
ていました。4歳ころからです。姉2人もやっ  
ていて、私も自然に始めたと思います。

小学4年生でコンクールに出て、全日本で1位を  
いただきました。それからはコンクールのた  
めにレッスンに行っていた感じです。毎日夜  
中まで。先生がすごく厳しくて、当時は  
すごく怖かったです。楽しんでいるだけ  
では1位なんて取れない、と。(弾くだけ  
でなく)踊れとか言われたし…。

— 作曲も、音楽教室に通う中で自然に興味を持たれた  
のですか。

そうだと思います。でも、私は小さいころ  
作曲は苦手だったんです。即興が大好きで、  
もう自由にわーっと弾いて。先生には自  
由奔放過ぎると言われました。どうやっ  
て1曲にまとめるんだというところでい  
つも立ち止まっていた気がします。

姉2人は今は作曲家ですが、子供のころ  
も私が作曲で先生に叱られているのを察  
して、いろいろ教えてくれました。作曲  
するときは何でも姉に聞いていました  
が、先生とは戦っていたようなところ  
がありました。

— ピアノに転向されたのはいつですか。

中2です。

— 何か理由があったのでしょうか。

ジャズに没頭し始めたのが小学4年生  
のときです。それまでは音楽の基本とい  
うことで、クラシックをやっていたん  
ですよ。

でも小4のとき先生が、コンクールで賞  
を取るには自由曲はフュージョンが  
いい、と言って持ってきたCDのベース  
が超かっこよくて、いろいろ聴くよう  
になりました。ピアノとベースとドラ  
ムというトリオの演奏を初めて聴いた  
CDは、オスカー・ピーターソンの「ウ  
エスト・サイド・ストーリー」なんです  
が、聴いたときに「どひゃー」ってな  
ったんです。なるほど、ピアニスト  
ってこういうことができるんだと。そ  
れでジャズピアニストになりたいと思  
ったのが小4。

— 小4で「ジャズ」ピアニストになりたい…。

そう。でもエレクトーンで全日本に出  
るんだったら、ピアノを弾いてる場合  
でもないんですよね、それで小6で全  
日本の1位をいただいたときに、(エ  
レクトーンは)もういいやとなっちゃっ  
て。

中学生になると自我もはっきりしてきて、先生と衝突も多くなって、このままじゃ続かないと思うようになりました。この段階でピアノにシフトしないと間に合わないということもあって、中2のときにエレクトーンをやめてピアノだけにして、高校もジャズ科のあるところに行きました。でもピアノとエレクトーンってまるで違う楽器で、何でこんなに弾けないんだというコンプレックスがずっと消えなくて。ピアノに自信が少しつき始めたのは、ここ2、3年です。

—— デビューについて伺いますが、最初のCDは自主制作でしたね。

高校卒業後に1人で勝手にドイツに行ったりしたんですが、日本に帰ってきて300枚だけCDを自主制作しました。そのころ割と大人に不信感を持っていて、反骨心から自分だけで作り、ライブのときに売ったりしていました。

—— その自主制作のCDが正式デビューの伏線なのですか。

はい。吉祥寺でそのCDを持って路上ライブをしていたら、今のマネジャーが近くに住んでいて、ふらっと遊びに来たときに私の演奏を聴いてCDを買っていったんです。名刺をもらって挨拶しましたが、大人を信じるもんかという気持ちもありました。

—— そこで大人への不信感再び…。

とても疑っていて、事細かに質問をしたんです。すごく態度が悪かったと思いますけど、彼は毎回会って丁寧に答えてくれるんです。10回ぐらいは会ったかな。今では彼を全然信じてますけど、本当に悪い第一印象だったと思います、私。

この人なら信じられるかなと思っていた矢先の2012年に、タワーレコードのキャンペーンにニューカマーとして出したいがどうか、1、2週間で決めてくれと言われてたんです。えーっ、タワーレコードって気後れする一方で、チャンスは掴まなきゃと思って、やりますと言いました。さっきの自主制作盤にボーナストラックを2曲付けることになりました。

タワーレコードは本当の話かな？と思って渋谷のお店に行ったら、何でっていうぐらい一番「でかい」ところに私がいたんですよ。このときにCDデビューすることの責任を感じた記憶があります。

—— 昨年発表されたアルバム「Somehow, Someday, Somewhere」は、ご自身とは50歳近く離れた大御所二人とのトリオでした。どのようなきっかけで共演したのですか。

ドラムのスティーヴ・ガッドと初めて会ったのは、2013年の東京JAZZです。2年後にベースのウィル・リーが来日した時のドラマーがスティーヴで、それを見に行ったときに私のCDを彼と、ウィルにも渡しました。

それ以来、スティーヴがプロデューサーの方に、俺はいつあの女の子と一緒にやるの？という話をしていたらしいのですが、プロデューサーは、女の子の肝が据わって準備ができるまで無理と言っていたようです。

話は変わりますが、私が2015年に曲が書けなくなって悩んでいたときに、スイスのモントルー・ジャズ・フェスティバルというフェスでピアノのコンペティションがあって、私はそれに日本代表として選んでいただいたんです。でもスランプ状態だったので自信がなくて、弾きたくないぐらいだったんです。

そのフェスはクインシー・ジョーンズ\*が統括していて、私の演奏前に、賞はどうだっていいからあなたの音楽を弾いてこいと言われて、ああ、そうだよなど。本来、全曲インプロビゼーション（即興演奏）というのはやってはいけないのですが、クインシーにそう言われて、今できることはこれしかないと思った私は全曲インプロしちやっただけです。

私のステージの後にまたクインシーが来てくれて、「あなたの音楽はちゃんとジャズだし、すばらしい。このまま自信を持って進みなさい、あとは生きるだけだ」と言われたんです。もう涙が止まらなくなっちゃって。挫けていた自分が恥ずかしいし、クインシーが帰っていくとき、何て力のある背中なんだろうと思って。そこで日本に帰る飛行機の中で「The Back」（背中）という曲を一気に書きました。それでスランプを抜けたんです。

\*マイケル・ジャクソンの大ヒットアルバム「スリラー」のプロデューサー。超大物ミュージシャン、プロデューサーとして世界中に知られる。

成田空港に着いてすぐにプロデューサーに、クインシーにこう言われた、今、私やる気がみなぎってもうスティーヴとできると思うので、お願いしますと伝えました。その後2年かけてスティーヴとウィルと共演することになったんです。

— うーん。壮大なストーリーですね。

そうです。長いんです。結構時間がかかって。

— 二人と演奏してみてどうでしたか。

見なくても耳だけで会話できるというか。深い海の中、母親のお腹の中にあるような感覚で、今までで一番ナチュラルにピアノを弾いていたなと思いますね。

— 昨年もう一つ発表された「Dear Family」は同世代の石若駿さんとのデュオですね。

初めはCDを作る話はなく、テレビ朝日の「サタデーステーション」、「サンデーステーション」という新しい報道番組のオープニング曲を私と駿君でお願いしますと言われたんです。駿君の音色と私のピアノなら二人だけでやった方が面白そうということで、まず「Dear Family」という曲を作ることに専念しました。

ただ番組のテーマ曲なので、局の方が選べるように20曲ぐらい候補を持って行ったんです。結局「Dear Family」に決まりましたが、他の曲も集めてCDを出すことになりました。

— 最新作「To The End Of This World」は大勢で演奏されていますね。ラップもあって驚きました。

ラップの「MAMA」という曲は母と喧嘩したときに作った曲です。Daichi Yamamoto 君に、あなたが思うお母さんへの愛情の表現の詩を書いてとお願いしたら、彼はジャマイカと日本のハーフなんですけど、お母さんの生い立ちを書いてきました。お母さんが日本に来て苦しまれたと思うんですよね。私はそれを詩にするのは結構勇気がいることだと思っていて、それが彼のお母さんへの愛情の表現の仕方なんだと思うと、ぐっと来るものがあります。

それと「919」という曲名は集団的自衛権の安保関連法が決まった日なんです。

日本では、音楽家って政治的な発言をしたり、人種のことを言ったりすると叩かれることも多いですが、音楽家の前にまずは一人の人として発言させてほしいと思っています。

— 一応法律の雑誌なので法律に関する質問をしたいんですが。

大丈夫かな。

— 先ほど大人に対する不信感って言われたときに、思わず弁護士を頼まなかったんですかってツッコミたかったのですが…。

そのときに弁護士という言葉がまず出てこなかったです。お金もないし。

— お金はともかく、身近じゃないということでしょうかね。

というか、弁護士さんに頼むとすごく大掛かりな気がしますよね。裁判沙汰になるんじゃないかみたいな。でも、私、裁判とか法律のドラマが大好きなんですよ。

— どんなものを見られるのですか。

いろいろ見ますよ。松潤（アイドルグループ「嵐」の松本潤さん）が出ていた「99.9」とかもずっと見てたし、「正義のセ」も見てたし。検察の話でしたけど、私大好きで。

— 法律家になってみたいと思われませんか。

私、絶対になれないと思うけど、検察官になってみたいですね。

弁護士だと情に揺さぶられて泣いちゃったりしそう。

— どんどころに検察官の魅力を感じますか。

冤罪とかもある中で、責任感という言葉だけでは埋まらない責任感みたいな、そういうすごく価値がある仕事だと思うんです。その人の人生に寄り添うというか。

全然視点は違いますけど、私も音楽を作るときにその人に寄り添うことができたらすごくいいなと思うし、それこそライブとかCDだと、私はお金とか時間をいただいているんだという意味で、その人の人生の中にどうやって喜びを一緒にかみしめられる時間を



音楽を作るときにその人に寄り添うことができたなら  
 すごくいいなと思う。ライブとかCDだと、お金と  
 か時間をいただいてやっているんだという意味で、  
 その人の人生の中にどうやって喜びを一緒にかみし  
 められる時間を作るか、と考えます。

桑原 あい

作るか、ということを考えます。

— 最近はまっていることはありますか。

私が好きなことは料理です。今日一日が終わるとい  
 うときに料理をして、ご飯を食べることが大好きです。  
 それとこの間、沖縄でトロリングをしまして。今は  
 まっているというか、やりたいことは釣りです。

— オフには常に釣りに行きたい感じですか？

常にはではないですけど。オフの日はだいたい島忠に  
 行くか。あっ、島忠ってでっかいホームセンター。

— 「シマホ」ですね。

「シマホ」です。でっかいシマホが大好きで、私の  
 中ではディズニーランドと思っているんですけど。

近所のシマホに行くか、映画を見に行くか、釣りに  
 行くか、野球。

— 結構多趣味ですね。でもシマホというのが意外で面  
 白い。

本当ですか。昨日行きましたよ、シマホ。

— どんなものを見るんですか。端から端まで？

端から端まで。超楽しかったですよ。育てている葉  
 っぱ（観葉植物）に合う植木鉢を買いに。でも植木  
 鉢を買いに行って、掃除用品でいいのが出てると買  
 っちゃいますね。

— ロボット掃除機とか？

違います、違います。カビが落ちる新しいのが出た  
 とか、いろいろあるじゃないですか。

— 洗剤系？

洗剤系とか、排水溝に入れると匂いがしないやつと  
 か。家をきれいにするのが好きで…。お風呂の桶とか  
 本当に日常の。キッチン用品とか、古くなっていたタ  
 ッパーを全部変えようと思って、いきなりタッパーを  
 爆買いしたりとか。

— タッパー爆買い…。

結局昨日も結構な量を買っちゃって。

— すごく親しみを感ずます、そういうところ。

私、超普通なんですよ、その辺が。音楽も普段はそん  
 なに聴いていなくて。耳が疲れちゃうんですね。職業  
 病だと思んですけど、ちょっと耳も休めるといふか。

音楽じゃないことの時間をすごく大事にしていて、  
 結構普通な生活をしています。

## プロフィール くわばら・あい

1991年生まれ。2012年「from here to there」でデビュー。  
 2017年にテレビ朝日系報道番組「サタデーステーション」「サン  
 デーステーション」のオープニングテーマ、また2018年4月より  
 J-Wave「STEP ONE」のオープニングテーマを担当するなど活  
 動は多岐にわたる。2018年8月最新作「To The End Of This  
 World」をリリース。